



話題の本棚

ポール・オースター著、柴田元幸訳『4321』

イーサン・モリック著、久保田敦子訳『これからのAI、正しい付き合い方と使い方「共同知能」と共生するためのヒント』

特集／大阪

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

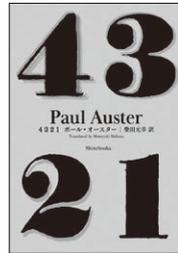
「4321」を読む——ポール・オースター追悼

4321

ポール・オースター 著

柴田元幸 訳

新潮社



二〇二四年四月、ポール・オースターが死んだ。いつまでも生きていたのだと勘違いしていたから、途方に暮れた。彼はもう、新作を一行たりとも書くことはないのだ。

でも日本に住む僕たちにはまた、新しく訳されるいくつかの作品を新刊として手にする特権、生の錯覚を覚える特権が残されている。そのひとつが彼の生前最後の大作、『4321』だ。本書は、主人公アーチボルド・ファーンガソン（アーチャー）の祖父（イサーク・レスニコフ）が、アメリカに入学した瞬間にイカボッド・ファーンガソンに（聞き間違いのせいで）変身するところから始まる。でももし、入国審査官が正しく名前を聞き取っていたら、この偶然がなければ、どうなっていただろう？ アーチャーは、違う名前でも、違う人生を？ そう、この小説は、ひとつには、この「もしも」を巡る物語だ。木から落ちて骨折したとき、アーチャーはこう考える——「同じ木から落ちて一本ではなく二本脚を折ったとしたら？ 両腕両脚を折ったとしたら？ もし死んでいたら？ そう、どんなことだってありうる。なにかがある形で起きたからといって、ほかの起き方はいくらもないということはない。すべてが違っていった可能性がある。かくして読者は「もしも」のアーチャーたち四人が、四通りの人生で成長

するさまを読んでゆくことになる。

その中でアーチャー（たち）を翻弄し続けるのは、二〇世紀後半の様々な事件だ。一人は人種問題による暴動に巻き込まれたことをきっかけに、不思議な絆を発見する。一人は、フランスに渡航して新時代の映画（ゴダール、トリュフォー）と新しい恋を見つける。一人は、大学紛争に居合わせ、新聞記者としてそれを報道する。しかし共通しているのは、どのアーチャーも、それぞれの可能性の部屋のおかげで、隣の部屋のことを知りうべくもないまま、それぞれの人生を懸命に生き、成長してゆくということ——だから、この小説は「もしも」の話であると同時に、それぞれにとつての「この」人生を懸命に生きる、青春についても話でもある。

そんなこんなで、八〇〇ページ（しかし、オースターの巧みなストリーテリングと心地良い文体は決してこの分厚さを重荷にしない）にわたるアーチャーの冒険を彼とともに生き、小説が終わりを迎えるようにするまさにその時、我々は見知らぬ固有名詞に出くわして驚く。「ムーン・パレス」——アーチャーが行こうとして行けなかった中華料理店だ。同じ名前を冠したオースターの代表作の一つでは、この店に通う青年の冒険が描かれていたが、今回アーチャーはそこから数ブロック先の別の店で酔い潰れ、二人は出会わない。しかし、この事件ならぬ事件は、「4321」の世界に五つ目の可能性の部屋を作り出し、僕たち読者は、書かれることになかった「もしも」を——二人が遭遇する世界を——今もつこの世にいないオースターに代わって心の中で書き始める。

（八〇〇頁 税込七二五〇円 11月刊）

共に生きる知性——生成AIとどう向き合おうか

これからのAI、

正しい付き合い方と使い方

「共同知能」と共生するためのヒント

イーサン・モリック著

久保田敦子訳 KADOKAWA



生成AI。かくも衝撃的なツールの登場により、生活は一変した。私も大学院で研究するなかで、英語論文の要約や経費管理など、さまざまな場面でその力を借りている。おかげで研究生生活は幾分か楽になった。だが、顔の見えないAIと日々やりとりを重ねるうち、ふとした不安も芽生えた。依存が深まれば、思考が鈍ってしまうのではないか——そんな懸念を抱えながら手に取ったのが本書だった。AIの活用法を研究してきた経営学者モリックは本書で、研究成果と実体験に基づき、読者に有益な視点を提示する。AIを「道具」や「脅威」としてではなく、人間と共に考え、学び、想像するパートナー、共同知能（co-intelligence）として捉えるべきだと。本書は生成AI、とくに大規模言語モデル（LLM）の基本的な性質や機能について触れながら、具体的な活用方法を紹介する。AIは使い方次第で、アイデアマンにも家庭教師にもコーチにもなりうる。著者が提唱する、AIと協力するための4つの原則——常にAIを参加させる／人間参加型にする／AIを人間のように扱う／今使っているAIは今後使用するとAIよりも劣悪だ」と仮定する——は、シンプルながら本質的だ。

◆AIに人格を与えよ

なかでも衝撃を受けたのは、「AIを人間のように扱う」ことの、さらに言えば「AIに特定の人格を与える」ことの威力だ。著者は本書の執筆にあたり、生成AIに複数の人格を設定して活用している。尊大で批判的な視点を持つ「オジマンディアス」は構成の無駄を削ぎ落とし、より洗練された文章に導く。一般人代表の「スティーブ」は平易で分かりやすい表現や構成を提案する役割を担っていた。私も試しに「オジマンディアス」にこの書評に対する助言を求めてみると、『生成AI』という書き出しは書評全体の文体に比して大仰すぎる」など、建設的なアドバイスをくれた。

LLMは人間のような振る舞いを見せるため、専門家や友人、批評家といった人格を演じるよう指示することで、より目的にあったアウトプットを引き出すことができる。研究生生活において指導教員や身近な院生からのフィードバックは重要だが、それを得るための心理的ハードルが高いのも事実だ。そんな時、そばにいる相談相手としてAIを使うと、日々の小さなつまづきを軽やかに越えられる。要約やアイデアの列挙はAIの得意分野であり、人間はその内容の妥当性や論理性を見極める役を担う。こうした役割分担を前提とした「サイボーグ的」な知的生産の方法を、著者は提案する。

AIのある世界に生きているという事実は、もはや揺るがない。だからこそ、どう向き合おうかが問われているのだ。本書を手に試行錯誤を重ねると、共生の輪郭が少しずつ見えてきた。（たいやま）

大阪

岸政彦、柴崎友香著
河出文庫

ぼくが生まれ育ったのは淀川にほど近い住宅街で、団地が並んで代わり映えない、のっぺりとして、静かな町だ。公園はやたら多かつたけれど、そこに遊ぶ子供たちの姿は小学校六年



のあいだにもみるみる減っていった。一方で老人は多かった。けれどもそのうち、彼らも姿を消した。いま、店の閉められたシャッターには、万博のポスターが貼られている……。

ぼくにとっての大阪は、そんな街である。もちろんそれは「大阪」ではないのかもしれない。道頓堀や梅田には、人が溢れかえっているだろう。そこでは関西弁が賑々しく響いているに違いない。けれどもそうでない「大阪」もまた「大阪」なのだ。たとえば、港湾近くの工場。あるいは、河川敷と堤防。——本書で語られるのもまた、そんな《すこし寂しく、静かで、だだっ広い》方の大阪である。

本書は、大阪に長く暮らしてきた社会学者岸政彦と、大阪に生まれ育った小説家柴崎友香、ふたりが交互にこの街の記憶を語る、往復書簡のような一冊だ。精緻で情感豊かな語りを共通させながら、ふたりの視点は微妙に異なっている。たとえば、岸が衰退のうちにあるこんにちの大阪を語る一方で、柴崎はいまとなっては失われた大阪の風景を懐かしく思い出す、という具合だ。もちろん反対に、岸が思い出しに耽り、柴崎から鋭い現代批判が繰り出されることもある。そうして複層的に立ち上げられる「大阪」の姿——生きた人びと、積み重なる時間、居た場所、交わされた言葉。それらすべてが「大阪」であり、その総体を、ぼくらは生きてきた。ああ、ここにはぼくの知っている大阪がある——本書を読んで、ぼくはそんなふうを感じ入った。

(水炊き)

(288頁 税込990円)

特集

大阪

大阪といわれて、何を連想するだろうか。東京に次ぐ第二の都市。食い倒れ、阪神タイガース、あるいは、お笑い……。「水の都」や「天下の台所」なんて言葉もある。今年であれば何といっても、1970年以来的の「万博」だろうか。しかしそのいずれも大阪の要素ではあるけれど、すべてではない。それらの言葉では捉えきれないこの都市を、読書を通じて味わってみよう。

(水炊き)



エコール・ド・プラトーン(1・2)

永美太郎著
リイド社

東京が関東大震災で焼け野原になった大正十三年——文化と経済は大阪に居を移し、人口は世界で六位に。この地は東の間、すべての中心になった。この時代の大阪を、「大大阪」という。



そこで創刊されたのが雑誌『苦楽』であり、菊池寛や谷崎潤一郎など錚々たる面々が寄稿した。本書はこの雑誌を発行していたエコール・ド・プラトーン（プラトン社の面々）を描く漫画である。

第一巻で描かれるのは、『苦楽』創刊のために奔走する（のちの直木賞作家）川口松太郎の青年時代、つまり彼が無名の「松つぁん」であった頃の話。様々な文豪たちの人となり描かれるなか、中心に据えられるのは直木三十五の底の知れない軽薄さど鬼才である。現代では忘れられがちな大衆文化のスターであった彼の姿からは、大衆文化を支える雑誌というメディアに賭けられたプラトン社の面々の熱い想いも浮かびあがる。

代わって第二巻で描かれるのは挿絵画家・岩田専太郎の物語。震災で全てを焼かれた彼が自らの作風を見出すまでの苦闘が描かれ、小説を読むだけでは分からない、当時の文学の総体を知ることができる。のちに女優になる専太郎の妹、とし子のモガっぶりも必見。

とはいえ、「大大阪」時代も長くは続かなかった。東京の復興により、大阪に花開いたモダンニズム文化も儚く終わりを告げ、『苦楽』は廃刊に、プラトン社の面々もそれぞれの人生を歩んでゆく——幸福な季節はあくまで束の間に過ぎなかったのだ。しかし、プラトン社が居を構えた堂島ビルヂングは今でも立っている。耳をすませば彼らの笑い声だって聞こえてもおかしくはないだろう。（コーク）

(224頁 税込792円)

K氏の大阪弁ブンガク論

江弘毅著
ミシマ社

例えば車海老の「おどり鯨」を食べる一場面。

「その動いてるのが値打ちやがな」

「早よ食べなさい、食べたかて化けて出えへんが」

「車海老のお化けなんか、出たかて恐いことあれしまへんで」

K氏が《とてもとても大阪らしい》と喜ぶこのやりとりは、大阪船場のええしのご家庭を描いた小説、谷崎潤一郎の『細雪』から。いわゆる「標準語」からはみ出た表現。ただ、はみ出ているのはことばのリズムや間、語彙や文末表現だけではない。《そのひとつが「おもしろい」かどうか》とK氏は言う。

《K氏のいた中学校では「おもしろい」かどうかが常に問われていた》とのこと。わかる。K氏の地元・岸和田とは少し離れるが、同じく大阪弁が母語の私が育った場所も似たようなものだった。K氏が繰り返し言うように、芸人みたいの人に笑わせるようなおもしろいことを言わなあかんというわけではない。会話している双方が「納得」するのに「おもしろいこと言う」のが必要という話である。ここでの「おもしろいこと」は目的語ではない。双方の合意点としての落とし所（オチ）へと会話を運ぶ様を表す副詞なのである。

大阪弁とは、ことばの形式のことだけを言うのではない。ことばの言い回し、会話の中の立ち回り、つまるところは人となり、思考・表現・行動の様式である。そんな大阪弁で世界や人のありようを「書く」というのはどういうことか。大阪弁で解釈して思考して、それを（できるだけ）大阪弁で書いてみたのが本書である。町田康、和田竜、司馬遼太郎、山崎豊子らが書く《大阪の街とそこに暮らす人達》をぜひK氏と共に。（ひるね）

(256頁 税込1870円)



「民都」大阪 対「帝都」東京

思想としての関西私鉄

原武史著 講談社学術文庫

汽車が黒煙を焚いて走り始めたとき、日本は近代化の狼煙をあげていた。天皇を擁する東京が「帝都」として誕生したその裏側で、大阪は——。

東京にも大阪にも縁のない田舎生まれの私が初めて関西に来たとき、まず驚いたのが JR 以外の電車の多さ。京阪、阪急、阪神、近鉄、南海……。訳が分からなかった。さすがにもう慣れてはきたけれど、梅田のあの迷宮のような地下街を攻略できためしはないことをここに白状しておく。

さて、著者曰く、この梅田こそ私鉄王国たる大阪の歴史が詰まった空間だ。国鉄という装置を通して東京を中心とする「官」が全国各地に張り巡らされていった明治時代、かたや関西では私鉄が次々と開業した。その沿線には郊外住宅地、甲子園や宝塚歌劇団などが拓かれ、豊かな市民文化が花開いていく。

「東風吹く春に魁て 開く梅田の東口
往来ふ汽車を下に見て 北野に渡る跨線橋」とは阪急電鉄の創業者・小林一三による唱歌だ。阪急は当時、国鉄を上から跨ぐ唯一の路線であった。そして1929年、日本初のターミナルデパートとして誕生した阪急百貨店は地上8階建て——まさしく国鉄の大阪駅を見下ろすかのように聳え立っていただろう。「官」に阿ることなく、独立独歩の繁栄を続ける大阪が「民都」たる所以がここにある。

本書の後半では、昭和天皇の大阪行幸を機に「民都」が「帝都」に侵略されていく様が描かれる。近代日本の軌跡を切り取るにあたり、鉄道と天皇という2つのレンズの取り合わせの妙が光る作品だ。そこに映し出されるのは、私鉄が織りなす大阪文化の肖像である。1998年サントリー学芸賞受賞作。（浅煎り）

(312頁 税込1331円)



歩く大阪・読む大阪

大阪の文化と歴史

平田達治著 鳥影社

大阪屈指のグルメ街・法善寺横丁。その一角にある善哉屋の軒先にちょこんと座っているお多福人形を見て、主人公は「何年経っても同じ顔してよる」、食べ物おんなの匂いにつられて歩き回

る人々をいつまでもこうして眺めているのだろうと思う——上司小剣「鱧の皮」の一節である。この店名を使って代表作「夫婦善哉」を著した織田作之助は、法善寺横丁を「最も大阪的なところ」と紹介している。残念ながら街は空襲で焼けたが、善哉屋は場所を変えて営業を続け、件のお多福も二代目、三代目と引き継がれて大阪を眺めているらしい。

変わったものも変わらないものも、「書かれた大阪」に刻まれている。本書はそんな、文学の中の大阪をめぐる一冊。前半では、上町台地からはじまる文化と歴史を丹念にたどる。古代難波宮から、豊田秀吉の大阪城を経、船場が整備されると「水の都」となり、元禄時代には井原西鶴をはじめ独自の町人文化が花開いた。

後半では森鴎外の歴史小説「大塩平八郎」から、戦後の復興期を描いた宮本輝「泥の河」まで、様々な大阪を切り取った数篇の作品を概説する。道頓堀や「花街」宗右衛門町の織田作之助作品はもちろん、エトランジェの目から見た水上龍太郎「大阪の宿」も取り上げ、多面的に大阪を浮かび上がらせる。本書の一番の魅力は地理的補足の細かさだ。大阪を「心の故郷、ことばにつながる故郷」だという著者が実際に街を歩き、撮影した写真まで掲載されている。眼前の風景から、往時の景色がしのばれる。携えて歩くにはかさか分厚すぎるが、著者の大阪愛の重さということでご容赦願いたい。（くたくた）

(480頁 税込2530円)

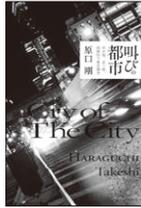


叫びの都市

寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者

原口剛著 洛北出版

高度経済成長期、工業の勃興にともない、大阪港には貨物が殺到していた。沖合に停泊する船内の過酷な環境のなかで荷物を運んでいたのは、最下層の日雇い労働者たちだった。



資本が都市を機能させるためには、流動的な労働力が必要不可欠だ。生存のために職を求めて都市を流動する無数の労働者たちは、ドヤ（簡易宿所）が集まる釜ヶ崎の「寄せ場」で生活した。そして彼らはこの地を拠点に、低賃金で労働力を酷使しようとする資本主義の暴力と闘ってきた。釜ヶ崎に刻まれた無数の身体の、その叫びは、いかなる空間を生み出したのか。本書は十年以上に渡る現地での聞き取りと文献調査から、釜ヶ崎の生成の過程を丹念に描き出す。

戦後、行政は釜ヶ崎を「あいりん」と呼び替え、暴力やスラムのイメージを覆い隠そうとしたが、一方で違法な斡旋業者を黙認した。労働者の怒りは暴動として噴出し、1970年代には組織的な運動へと結実する。彼らは釜ヶ崎と東京・山谷など各地の「寄せ場」を行き来し、課題を共有し連帯を築いた。「寄せ場」は労働者が主体的に集まる「寄り場」へと変貌していったのである。

1990年代以降、不況のなかで日雇労働市場は急速に縮小し、釜ヶ崎はドヤ街から生活保護受給者と観光客の街へと姿を変えた。だが「寄せ場」は消えていない。人びとはインターネットを介して分単位で時間を切り売りし、非正規の日雇派遣労働に従事している——「社会の総寄せ場化」が進行しているのだ。集う場所もない現代の労働者が「寄り場」を取り戻し資本主義の暴力に抗う手がかりを、釜ヶ崎の声は耳打ちしている。（たいやき）

(440頁 税込2640円)

大阪マージナルガイド

吉村智博著

解放出版社

本書の冒頭、見開きで近世／近代（明治以前／以後）の二つの時代の大阪市中央区を示した地図が目に入る。近世には墓所があり、賤民の住宅があったところが、近代以降、病院や屠畜場に置き換わったことが見て取れる。同じ中央区内にもかかわらず、長堀川と道頓堀川に挟まれた大阪の「中心」からわずか三キロほどしか離れない「周縁」のこの風景は一体どうやって出来上がったのか——本書は、そんな問いに導かれた風変わりなガイド本である。

本書で描かれているのは、近世の身分社会が近代の階級社会へと遷移していく中で、なんとか時代の趨勢に抗おうとした「周縁」の人々の生き生きとした姿である。ある時には起業家が商機を見出し（中山太一）、またある時には医者が労働者を世話し（本田良寛）、またある時には活動家と政治家が論戦を交わす（栗須七郎と沼田嘉一郎）。今は亡き「周縁」のキーパーソンや失われた街並みを、今も残る記念碑や寺社を経巡りながら回顧することで、近世と近代のつながりを多面から描く。

しかし、実を言うと、私は大阪によく行く機会がありながら、こうした「中心」と「周縁」の違いには肌感覚では気づいていなかった。それは著者も言うように、ここ数年（特に最近では万博の開催など）で大阪の風景がガラリと変わってしまったこともあるだろう。街が変われば人も変わる（逆も然り）。中央区の近世と近代をつなぐ記念碑や建物の取り壊しは、文字通り「周縁」の歴史の象徴を取り払ってしまったのかも知れない。では、モノを破壊したうえでなお残る中央区のあの感じ、壊すに壊せない大阪のあの独特な空気感は、いったいどこから来るのだろうか？（倉井）

(176頁 税込1760円)



新刊コーナー

擬人化する人間

脱人間主義的文学プログラム

藤井義允著

朝日新聞出版



他人の言葉のなか
に自分の姿を見つけたとき、個人的だと思っていたこの時代性にとまどとする。著者は二〇一〇年代の作品に自分と同じ「人擬き」を見つけた。だから本書は、社会批評、文芸批評であると同時に、「僕自身を探る営み」「僕のものではない、借用した言葉を使って自分を模索してみる作業」なのだという。

テクノロジーの発展は人間をシステムに還元し、インターネットの発達は「正しさ」を際限なく相対化する。近代的な「私」は瓦解し、脱人間化／擬人化が進む社会。そんなテキストピアで、「私」という主体をどう構成し直すか？ 目指すべき「新しい人間像」はどこにあるのか？ これが本書の問いであり、作家たちが試行錯誤を重ねてきた問題だ。たとえば、「コンビニ人間」で芥川賞を受賞した村田沙耶香は自分を柔らかく変化させて固

いシステムに対応し、京大出身でもある平野啓一郎は分人主義を打ち出した。虚構であり、偽物である言葉は、だからこそ「私」という主体を軽やかに変身させる。

米津文師を扱う最終章ではタイアップ楽曲にも焦点を当てる。他作品の再解釈／再表現によって自分を表現すること。これは本書自体の在り方にも重なるように思う。借り物の言葉でも、ばらばらになった自分を繋ぎ合わせ作り直すことができるなら、他人の言葉を「読む」ことが、「私」を見つげる一歩目になるのではないかと。(くたくた)

(二六四頁 税込二七五〇円 11月刊)

産む気もないのに
生理がよ!月岡ツキ著
飛鳥新社

DINKs Double Income, No Kids. とともに収入のある、子をもたない
と決めた夫婦のこと。

著者の月岡ツキさんは九三年生まれのライターで、「DINKs (仮)」をプロフィールとして用いています。この「仮」が、当エッセイ集の基調を表しているように思われます。

絶対に子をもたたくないと断言はできない。が、結婚したら子をもつものだとする世間にも同調できない。自分の立場をよく表してくれる言葉が、世の中にない。

「子供を産んだ人にしか分らない感情や、見えない景色」がきつとあると思ってしまうけれど、「自分の『母になるため』の機能とそれらを神聖視する風潮とはずっと相容れないでいる」(勝手に「機能」する自分だからだへの違和感が、本書の旋律線の二つ)。たしかに「子供が存在するだけで、そこに希望が生まれてくる」けれど、「子供を産んでも母たちが何も奪われず、何も脅かされない社会」からはまだまだ遠い……。

このようにゆれつづく本書を読みすすめても、明確な答えにたどり着くことはありませぬ。しかし、あとがきで月岡さんは次のように書いています。「子供を持つか持たないか、そこに私のアイデンティティはない。どっちに転んだって、結局私はこの私しかいなくて、それでいいのだ。そんなふうに、書くごとにどんどん気が楽になっていって、今はとても清々しく、軽やかな気分だ。」

この軽やかさの余韻を、読者も読みすすめるうちに受けとることができると思います。

(二三九頁 税込二七六〇円 12月刊)
(投稿・貸出更新)

コツがわかる！

カエルの見つけ方図鑑

松橋利光著
山と溪谷社



梅雨になると、北部キャンパスの田んぼでカエルたちが騒々しく鳴き始める。

注意深く見ると、道路に黒い点々が跳ねているのがわかるだろう。アスファルトに合わせ体色を変化させたニホンアマガエルである。

本書のカエルたちの写真は、泥の中で佇む姿であれ水たまりで肢体を伸ばす姿であれ、周りの環境に体色を溶け込ませるものがある。彼らは流動的な自然の系における一点であり、秋のイナゴを啜えたり冬のモズに啜えられたりと、移ろう季節の食物連鎖の一員であることから逃れられない。

しかし彼らはそんなことは気にも留めない。水たまりで鳴くカエルを奥から蛇が狙う写真では、蛇の姿はぼやけており、カエルは蛇にまるで気が付く様子がない。泥に塗れ両手でミミズをガツチリ掴みムシヤムシヤ食べる写真も、目先の食料に夢中で、著者の視線たるカメラの存在には無頓着だ。カエルたちは川に体色を同化させていようと、流れをもの

ともせず右にへばりつく。微動だにせぬ横長の瞳孔の無機質さは、我々の一切の共感を寄せ付けぬ。

梅雨にゲコゲコ鳴き立てるカエルたちは、人間の視線から解放されているのである。雨に濡れる人間は周りの視線を気に立て情なく部屋に閉じ籠るばかりだが、敢えて雨の外に繰り出し、本書の指南に従いカエルを捕まえ持ち帰るのもよいだろう。室内灯の下に引きずり出し無機質な眼球をじっと見つめれば、瞳の奥から何かが返ってくるかもしれない。

(二二七頁 税込一七六〇円 3月刊)
(投稿・北島)

科学を否定する人たち

なぜ否定するのか 我々はいかに向き合うべきか？

ゲイル M シナトラ パーバート ホフアー 著
榊原良太訳 ちとせプレス



かつて地動説を主張したガリレオは異端者として有罪判決を受けた。また微生物や病原体が病気の原因となるといふ説はなかなか受け入れられず、多くの人の命が失われた。それから時間は経ち、科学の進歩により人々の生活水準は劇的に向上したが、科学

に対する否定や抵抗が無くなる気配はない。なぜ科学否定は生まれるのだろうか。私たちはどう向き合えばよいだろうか。それを教えてくれるのが本書である。

著者によれば、科学否定の背景には様々な心理的要因があるという。認知バイアス、認知的認知、動機づけられた推論、社会的アイデンティティ、感情。この五つの心理学的概念を通じて、人間がいかに影響されやすく、簡単に誤った情報に引き込まれてしまうかを説明している。科学リテラシーが十分にあると思いついていた評者にも心当たりが多数あり、読みながら何度もハッとさせられた。さらに本書では、科学の根本的な考え方から出発し、情報をどう受け止め、伝えていくべきかを多角的に提案している。読者個人だけでなく、教育者、科学コミュニケーター、そして政策立案者にとっても示唆に富んだ内容となっている。

科学的な証拠を否定する人々を冷ややかに見ている人もいえるかもしれない。しかしバイアスや感情は誰しもが持っており、我々も決して他人事ではない。自分が正しいと思っ

ている知識や理論にも感情による歪みやバイアスがあるかも？ そう思ったら本書を手にとってみては。

(三二二頁 税込三〇八〇円 3月刊)
(竹輪)

歌燃えあがる炎のために

フアン・ガブリエル・バスケス著

久野量一訳

水声社



《ほくは、あらゆることを、あらゆるはじまりを、あらゆる物語を、そのどれひとつとしてほくからごぼれ落ちてしまわぬように、語らなければならぬ。なぜなら、そのどこかに真実が、このどてつもない出来事の中にほくが探し求めているちっぽけな真実が見つかるかもしれないからだ。》

本書に収められた九つの小説は、いずれもそんな、物語ることへの切実な意志に貫かれている。それゆえに各作品の趣向は、物語という営為を揺さぶるように複雑だ。

たとえば「蛙」という一篇、退役軍人たちが集まる式典で、脱走兵だったサラサルはまるで戦争に行ったかのように話を合わせ続ける。ええ、憶えています、隅々まで憶えています——。けれども脳裡に浮かぶのは、戦場を経験しなかった記憶であり、それはある意味でもうひとつの、戦争の時代の体験だった。物語られる記憶と物語られない記憶のはざままで、小説の語りもまた引き裂かれてゆく。

このように語りとは「騙り」と表裏一体である。物語は真実をとりこぼし、ときに歪め、あるいは物語りえないものも、世界には多く存在する。ならばなぜ、物語るのか。

それはきつと、語ることと同時に「聴く」ことでもあるからだろう。そうしてひとは物語るだけでなく、それをまた聴き伝えるのである。「最後のコリド」という一篇で、声を失った歌手は若き歌手に録音機を差し出す。装置は語る。さあ、お前が歌う番だ。ここで、歌とはすなわち物語だ。物語は託された——そう、われわれにもまた。(水炊き)

(二六五頁 税込三三〇〇円 11月刊)

中国目録学

清水茂著
ちくま学芸文庫

中国には、目録学という聞き馴れない名前の学問がある。文字通り本やその著

者の情報のまとめ方に関する学問で、本書は約30年前に書かれた入門書となっている。

中国は紙の発明で西洋に先んじていたこともあり、国家主導で四書五経に関する注釈書

の目録作成などをおこなってきた。そんな背景もあってか、本書では材質の変化(竹↓紙)が、各時代の学問に関する多様な営み(暗記や資料の保存)と密接に関係していたことがたびたび強調される。こうした、文字よりも文字が書かれたモノに着目する視点は、社会学のメディア研究にも通じるものであり、初版がやや古い本書の議論に、歴史学を越えた広がりをもたせているといえるだろう。

また本書では、紙の普及により、時代が降るごとに指数関数的に書物の量が増えるのでその目録が作られ、するとその目録をもとにまた別の目録が作られ……と、書物のネットワークが網状に張り巡らされていく様子が描かれている。このように、中国では印刷技術の発展と書物のネットワークの形成が同時に発展してきたことを、本書は教えてくれる。

それだけではない。ある意味ではこの本自体が、本に関する本に關する本(!!)でもあるように、目録学的な営みは今の私たちの日常生活にも浸透しているといえるのだ。このように、中国史を書かれたテキストの継承ではなく文字通りその紙背から見てみることで、単なる歴史学の議論を越えて、学問の形成そのものが、より肉体化された、立体的なものに見えてくるはずである。(倉井)

(二二六頁 税込二二〇〇円 12月刊)

詩人たちの自然誌
一九世紀初頭ドイツ語圏の
文学と科学

時田郁子著 国書刊行会



一八世紀後半から
一九世紀初頭、それ
は啓蒙と自然科学の
発展に象徴される近

代的理性の時代である一方で、非合理的な世界
への探求に突き動かされた時代でもある。民
間伝承、疑似科学、幽霊騒動、ペテン師たち、
こついったものが合理主義と緊張関係を保ち
ながらアンビバレントに受容されていた。い
うなれば、「科学」から神秘が剪定される狭
間の時代だ。それを担っていたのは種々様々
な知的エリートたる詩人たちであった。総合
知としての自然科学と詩的想像力のアマルガ
ム、科学と詩が混然一体となった自然に対す
る深い眼差し、それがこの時代を特徴づける。
本書の目次を眺めてみよう。四大精霊、探
検博物学、幽霊、カリオストロ、メスメリズ
ム、人形、人造人間……ここで展開されるの
は、ヘルダー、ゲーテからロマン派に至る詩
人たちが、自然というスクリーンに投じる魔
術的幻燈だ。啓蒙の時代にあつて、民衆本で
語られていた超自然は復権し、精霊譚が描か

れる。博物学者は総合知を追い求め世界周航
の旅路へ漕ぎ出す。そして自然科学はまたオ
カルティズムにも漸近しうる――。

ロマン主義時代の自然科学は（後に精神分
析に昇華される動物磁気のような）近代科学
の胚珠を産み落とし、超自然とすら手を携え
て、独特な詩的世界の母体となった。文学と
科学の二焦点が描く楕円軌道としての世界像
がここに広がる。科学史・社会的背景を解
説しながらそんな詩人たちのテクストを紐解
く本書は、読者を不可思議の世界へ誘うガイ
ドブックだ。ドイツロマン主義文学の面白さ
を存分に伝えてくれる画期的名著。（猫足）

（三二二頁 税込三五二〇円 2月刊）

聖者崇拜

キリスト教の正体

ピーター・ブラウン著

阿部重夫訳 青土社

聖者
崇拜

聖者の亡骸を掘り
出し、切り刻み、彼
方此方にはら撒き、
崇め奉る。死骸は聖
別され、生死の境界は破壊される。かくも忌
まわしき崇拜は、なぜ擡頭したのか？

分かりやすい説を二つ。異教が駆逐され、
キリスト教が勢力を増していった古代末期。

崇高な教義を解すべくもない愚鈍な信徒たち
の迷信に、知的エリートたる聖職者たちが屈
服した結果、死者を奉るようになった。エリ
ートの宗教経験と俗衆のそれは二元的に捉え
られ、異質なものと見做される。

しかし、聖者崇拜がキリスト教に取り込ま
れていたプロセスを、単純化された形で捉
えることはできない。先述したような二元的
「二層モデル」に対して、ブラウンは「想像
的弁証法」を提示する。パトロンと被庇護者
都市と邑里、浄と不浄、そして生と死、様々
な闘ぎ合いによって、聖者崇拜は形作られて
いった。

我々の「生」と誰もが恐れる「死」。殉教
者の遺物はまさに生理的な死と密着したもの
であるにも拘わらず、元の肉体という生々し
い実体から切り離され、聖遺物として分割さ
れる。そして死者から時間を閉却させ、逆説
的に信徒に天国の甘美な心象を与える。最も
肉体的な死に近い遺物は、死に際した殉教者
の勇気を想起させ、信徒の胸を躍らせる。

講義録を基に執筆された本書の語りは難解
極まりない。しかし、ブラウンの博覧強記ぶ
りに慄きながらも読み進めた先――初期キリ
スト教の辿った複雑な歴史の中にうねる、
「カルト」の姿が立ち上がる。

（四〇〇頁 税込四一八〇円 2月刊）
（荒砥）

個性幻想

——教育的価値の歴史社会学

河野誠哉著
筑摩選書



日本で教育を受けて育った者であれば、どこかで誰もがふれたことのある頻出語、「個性」——本書は、現代に氾濫することの語の「謎」を、近代以降の学校教育の系譜をたどることで読み解く一冊である。

著者はまず、大正期に芽生えた「個性教育」なる実践に目をつける。そこから、次第に「個性」の語そのものが「ことば」の次元に充滿し、規範的な価値を帯びていく歴史を描いている。本書の要点は、こうした「ことば」の次元で増殖する「個性」が、近代社会の特質——集団性や画一性、均質性——への反作用から生じたものと捉える点にある。

そして「個性」の氾濫は混乱をもたらす。「個性」のあおりを受けた領域の一つに「障害」があると著者はいう。障害は「個性」なのか？ インクルーシブ教育が口軽く語られる近年において、「障害＝個性」論をめぐる混乱状況を「個性」の語のイメージから読み解いた六章は白眉である。

学術的示唆に富むだけではない。「個性」の語の氾濫状況を身近な素材から平易に描いているところによって、著者の力量が垣間見える。『窓ぎわのトットちゃん』や『五体不満足』に現れる「個性」の語。「個性」の充滿のトリガーは、実は卑近なベストセラー作品にあったのだと。

「個性」の幻想のただなかで私たちが彷徨っていることを、歴史は教えてくれる。人間の包摂/排除という世界的課題を考えるうえでも、「個性」の語の系譜を辿る作業は存外役に立つのかもしれない。(投稿・大観音)

(二六七頁 税込一七五〇円 11月刊)

貧困へのまなざし

富裕層は貧困層をどのように見ているのか

カズホカミラヲキミカズシロシテシロルン著

川野英二、中條健志訳 新泉社



エリートと労働者との格差、分断の拡大は今や世界が直面する深刻な問題だ。セキユリティの強化された高級住宅街に閉じこもる富裕層は、外からの新参者に目をひきめ、貧困地域出身の使用人が盗みを働かないかと疑いの目を向ける。社会的な分断は、極

めて空間的な顔をしている。

この「壁」はいかにして生み出されるのか——現代フランスを代表する社会学者・ポーガムは、パリ、デリー、サンパウロでの調査から、貧困に対する「富裕層のまなざし」を明らかにする。曰く、地区への帰属はそれ自体が、自分が特権階級に属し、自分のあらゆる階級利益を守ることに腐心しているという信念に根差した、卓越性と社会的再生産の戦略の一部である。こうした道徳的な閉鎖性は、貧困層の不潔さや暴力に対する身体的嫌悪と結託し、不平等を正当化するロジックとして機能する。本書では富裕層による生々しい語りにかんがりの紙幅が割かれるのだが、そこには人々の共感と連帯が無慈悲なまでに無力化されるプロセスが仔細に浮かび上がっていた。

しかし三都市の比較という本書のスタイルは、即座に悲劇的な結末を導くわけではない。貧困の正当化のされ方も程度も、都市ごとに大きく異なる——つまり、分断は不可避ではない。ゆえに問題は社会体制をどう作るかの水準に差し戻されることになる。国際的な社会学の歩みと可能性を感じさせる良著だ。

ポーガムの前著『貧困の基本形態 社会的紐帯の社会学』に引き続き、分断を前にした社会学者の冷静なまなざしが光る。(浅煎り)

(二七六頁 税込三八五〇円 12月刊)

カラー新書
入門 日本美術史

山本陽子著 ちくま新書

日本美術史には「波」があるという。外来文化を取り入れ模倣する期間と取り入れたものを自分たちらしく熟成させる期間。これらを交互に経験し、大きな波を形成している。本書では、仏教の伝来（すなわち仏像との出会い）から、明治維新後の西洋画の受容と日本美術の再興までの日本美術史を概観する。

本書が軸とするのは、作品が作られた時代背景、そしてそれがいかに受け入れられたかという視点だ。当時の人々の眼にどう映ったのか。本書は現代の読者に迫体験を促す。

例えば平等院鳳凰堂。「阿弥陀浄土に生まれない」と願えば誰でも行ける浄土信仰だが問題が一つ。いざそのときによく知らない場所に「行きたい」と願えるか？ そこで事前のイメトレのために建てられたのがこの寺院。架空の世界へ行った気になれるテーマパークだと言われたら、我々読者も当時の人々のまなざしにこの眼を重ねることができそうだ。

折よく、現在京博では「日本、美のつば—異文化交流の軌跡—」が開催中だ。本書片手に訪ねてみるのはいかがだろうか。（ひるね）
（二八八頁 税込二四三〇円 12月刊）

スパルタ

古代ギリシアの神話と実像

長谷川岳男著 文春新書

日本において「スパルタ教育」で知られる古代ギリシアのポリス、スパルタ。古代から様々な逸話に事欠かないその社会の実態を探ることは、資料的な困難が伴う。その中でも筆者は文献資料以外も用いつつ、スパルタ社会を覆つヴェールを剥ぎ取り、実像を明らかにしようとする。

当時から閉鎖的だったスパルタを知る手掛かりは、主にアテナイの著作家の作品に限られている。ただ、描かれるのは印象的なエピソードばかりである。例えばたった三〇〇人でペルシアの大軍と戦い華々しく散ったテルモピュライの戦い。アテナイ社会への批判も含み、スパルタ人の死すら厭わず武功を求める姿は過度に強調される。理想化されたスパルタの虚像はギリシアが世界史の表舞台から退いた後もナシヨナリズムや優生思想の文脈の中で、近代に至るまで維持、利用される。その時々が必要に応じてスパルタのイメージは利用されてきた。スパルタ像の受容史は過去が現在を映す鏡であることを強く感じさせる。「スパルタ教育」もまた然り。（荒砥）
（二七二頁 税込二二七五円 12月刊）

非暴力主義の誕生

—武器を捨てた宗教改革

踊共二著 岩波新書

本書では、あらゆる暴力行為に対して無抵抗を貫くキリスト教のマイノリティ・再洗礼派の誕生と迫害の歴史、そして現状を描く。これらの人々は、ルターやツヴィンクリなどが暴力に基づく宗教改革を行うなかで、新約聖書から無抵抗の原理を引き出し、カトリックともプロテスタントとも言えない教義が誕生した。その後、多くのキリスト教徒から異端と見なされたことによる迫害から逃れるため、そして兵役拒否という違法行為の実践を行うため、亡命や再定住を繰り返す。

再洗礼派の信仰は、現在においても継続している。交通事故で子どもを亡くした再洗礼派の遺族は、裁判所に対して犯人である少年の減刑を求める署名を集めて提出した—これは彼らの「赦し」を体現した行為である。再洗礼派の行為は、本書でも度々ガンディの非暴力・不服従運動と比較される。自己防衛を認め、条件付きで暴力を許していたサツティーヤグラハとは異なり、再洗礼派は一切の暴力を認めず、他者を赦し、自らが信念に従って行動するのしるしだけを考えていた。（フラチ）
（二三八頁 税込二〇三四円 1月刊）

日本人の中でのマイノリティ、帰国生。

帰国生は、日本人的アイデンティティと非日本人的アイデンティティの狭間を生きる、所謂マイノリティ集団であると評者は思う。

ここでの帰国生とは、幼少期から高校までの学生時代、日本国外に長期で居住した経験のある日本人を指す。彼らには目に見える特徴がない上に、その多くが普通の日本人と変わらない生活を送ることを試みていることから、その苦悩は見えにくい。そして彼らには海外在住時に多くの苦悩があることはもちろん、帰国後に日本人からの「英語が話せて人の感情をくみ取ることが苦手な人」や「その多くが親の駐在により移住することから」実家のおかげでアドバンテージが得られる、「トクしている人」なごという差別とは言えない程度の偏見と闘うことになるのだ。

このような一見なんてことない偏見は、徐々に個人のアイデンティティを見失わせに来る。そのため、円滑なコミュニケーションのために表には出さないにしても、心の中ではこれらの偏見と闘い続ける必要がある。『帰国子女』という日本人（彩流社）は、一九七〇年代から八〇年代にかけて、ペルーという非英語圏の日本人学校に通っていた著者が、帰国子女とは何か、そして彼らが（主に帰国後の日本で）どのような困難に直面しているのかについて、自らの経験と結びつけながら語る。日本に帰ってからも定期的に同窓の仲間とペルー料理店で集まる著者が、日本帰国後に帰国生と日本人もしくは帰国生の中でも先進国と後進国で滞在していた人々のことを明確に線引きすることによるいじめに近いような嫌味を言われることをはじめとする不快な経験を繰り返すなかで、自らのアイデンティティとどのように向き合ってきたのかを描く。

私小説『不機嫌な英語たち』（晶文社）では、「日本の私」と「アメリカの私」を行き来しながら人生を歩むことで帰国生としてのアイデンティティと向き合う著者の半生を描いた。アメリカで英語の話せない外国人として過ごした幼少期。そして、大学以降、アメリカ文学を学び、教える立場になってもなお、「私」は同じ文化的背景を共有していない人々とのインタラククションの中で様々な経験をする。もちろん、「私」はポジティブな経験もすれば、後味悪いと思う経験もある。様々な経験を通じて、世界のどこに居てもマジョリティになることはできない帰国生が、アメリカ人や日本人、アメリカに住む非アメリカ国籍の人々と関係性を構築していくなかで、自分をどこに位置づけるのか、常に問い続けている。変わりゆく自分のアイデンティティをどのように見つめ直し、定義していくのか。様々な経験談とともに、その変化の片鱗に触れられる。

ここまで読んでくれた読者は薄々気が付いているかもしれないが、評者も帰国生の端くれである。そして、未だに語学的苦悩や偏見に悩まされる。教授の話しているスピードについていけないこともあるし、日本語が読めず意味が分からないことも。一方で、英語がネイティブ並みにできるわけでもなく、文法に関しては壊滅的である。このように当事者以外には理解され得ない苦悩を抱えているとしても、帰国生というアイデンティティは捨てられない。狭間で生きる帰国生は、無意識に感じる日本人からの孤立感と、いつまで経っても消えることのない偏見に折り合いをつけながら生きていく。もちろん、得をしていると感じることもあるが。そんな隠れたマイノリティに少しでも興味をもっともらえたら幸いである。

（フナチ）

シュルレアリスム——「主観」から「客観」への芸術運動

一九二四年パリ。アンドレ・ブルトンが『シュルレアリスム宣言』を発表した。シュルレアリスムという二〇世紀最大の芸術運動の始まりだった。それから時は流れ一〇一年、今なお幻想的なヴェールに包まれたその近寄りがたい運動に、ここでは、『シュルレアリスム宣言』の翻訳者・巖谷國士の『シュルレアリスムとは何か』を通じて迫りたい（シュルレアリスムに先行するアヴァンギャルド——未来派やダダ——に関しては塚原史『ダダ・シュルレアリスムの時代』が、ロシアのアヴァンギャルドに関しては『ロシア・アヴァンギャルド』が詳しい）。シュルレアリスムが目指したこと、それは一体何だったのか——。

*



巖谷はまず、シュルレアリスムへの誤解を解こうとする。辞書を見ると、シュルレアリスムは「写実的な表現を否定し、作者の主観による自由な表象を超現実的に描こうとする芸術上の方針」と定義されている。しかしここには大きな誤解がある。それは「作者の主観による自由な表象を」という箇所である。なぜならシュルレアリスムは実のところ「主観」をできるかぎり排して「客観」に至ろうとした運動だからである。シュルレアリスムは問う。私たちが「現実」と呼んでいるものは本当の現実なのか。それは「現実」だと思い込まされた主観的な現実、いわば「お約束」として成り立っている現実ではないかと。シュルレアリスムはそうした「主観的」な現実を代えて「客観的」な現実——「超現実」——を捉えようとする。『そんな日常の約束事とつきあっているうちに、なにかフワッ

と、見たことのない、未知の驚きをよびおこす現実があらわれたというようときに、それを『超現実』と呼ぶべきではないのか。

それゆえ「超現実主義」とも訳されるシュルレアリスムが捉えようとした「超現実」とは「より強度の現実」にはかならない（そこでの「超」は「超高層ビル」と同じ用法で、その度合いが高いことを意味する）。現実を「超えた」別の神秘的な世界を描くこと、それはシュルレアリスムの仕事ではない。そしてこの「超現実」を捉える手段としてブルトンが創始したのが、かの「自動記述」だった。

書く内容を事前に決めることなく、とにかく超スピードでオートマティックにペンを走らせる。それが自動記述である。巖谷が実体験に即して言うには、書くスピードを速めていくと、「私」という主語が文章から消え、代わりに不定代名詞である「誰か」が現われる。「誰か」が「私」を通じて考えているという状態に書き手は陥る。これは「ある種の神がかりに近い」。巫女がそうであるように、どこから送られてきたメッセージを自分の手を通じて書きとめる、そうした一種の忘我的な状態が生じるのである。そのときそこに展開されるもの、それが主観を超えた客観の世界にはかならない。

巖谷は言う。「主観にもとづいて幻想を展開するのではなく、むしろ、客観が人間におとずれれる瞬間をとらえるのが、シュルレアリスムの文学や芸術のありかただ」。ここで言われているように、シュルレアリスムはその後、文学を超えて芸術の領域——マッソンやミロの「自動デッサン」、デュシャンやエルンストの「デペイズマン」——へと広がりを見せることになる。「客観」＝「超現実」への到達を目指した芸術運動がそこに展開されてゆく——。（はや）

編集後記

はじめまして、4月号から綴葉の編集委員となりました倉井と申します。ざっくり本の研究をしています。

ここ十年、読書はもっぱら本でやってきましたが、大学院に入ってからには研究の都合で、PCやコピー用紙など、本以外のもので読書する機会が多くなりました。よく、味わいがある紙の本と、検索性が高い電子書籍との、どっちに軍配を上げるのかという話がありますが、実感としてはよくわかりません。むしろ、読む姿勢で変わってくる気がします。PCは重いので座ったほうが読みやすく、PDFは紙に印刷すると固い机の上に置かない限りは読めないの、寝そべりながら読める紙の本と電子書籍が最強ということになります。

あと、外国語と違って日本語は表意文字なので、頭の中で本を声に出して読んでいると、音読みか訓読みで迷って（軽業はなぜ「けいぎょう」と読まないのか）、モヤモヤが続いて集中できない、ということもよくあります。

このように、紙の本で読むことと日本語で読むことが可読性の点で真っ向から打ち消しあって、お互いの長所と短所がプラマイゼロになっている(?)のも、本を読むことの趣の一つだと思います。今後ともよろしくお願ひします。

(倉井)

当てよう! 図書カード

先月開幕した大阪・関西万博。開会式が行われた大催事場「シャインハット」の設計は、建築家の伊東豊雄さんが手がけました。さて、彼が受賞している「建築界のノーベル賞」は次のうちどれでしょう?

1. フィールズ賞
2. ヴェトレセン賞
3. ネビュラ賞
4. プリツカー賞

(くたくた)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは6月15日です。



《1・2月号の解答》 1・2月号の問題の正解は、3. のルッツでした。ルッツジャンプは6種類の中で唯一、助走で描いたカーブと逆方向に回転するため難易度が高いそうです。図書カードの当選者は、はばさん、堂本光一さん、●さん、イ大さん、ランンキュラスさんの5名です。当選おめでとうございます。

(ひるね)

読者がらひついで

○春はあけぼの……といいますが、明け方を楽しむ余裕もなくひたすら眠い。でも、新年度も忘れられない本に出会いたい。たよりにしています。綴葉メンバーズ!! ファイティン!! (いひみん)

——春眠暁を覚えず……ともいいますね。麗らかな春の日は寝ていても充実感があります。さて、新年度になり綴葉メンバーズもニューフェイスを迎えております。今月号からしばらく編集後記にてご紹介させていただきます。編集委員内の専門の幅も広がり、選書の幅も広がることが期待されます。

○ヒーローを特集するのはとても面白かった。タイムリーな話題をトピックにするのを続けたい。 (えび天)

——ありがとございます。ヒロアカの最終巻発売日が決まった頃から、12月号で特集するぞと意気込んでおりました。時期も合わり楽しんでいただけただよふ良かったです。

同じ本でも読む時期によって読み方が変わることがありますよね。今月号では、4月13日に開幕した大阪・関西万博に合わせた特集を組んでおります。大阪に注目が集まる今だからこそその味わいがあります。 (ひるね)